

子どもの自主性としつけに関する調査研究

碓 井 岑 夫

(1981年10月15日 受理)

Independency and Discipline: Research on Independency in Child Development

Mineo USUI

研 究 の 課 題

子どもの自主性は、自然発生的に形成されるものではないだろう。ヒトという種の子どもは、それ自身が成長・発達する内在的な力を持ち、その主体的なエネルギーが社会・自然環境との交流によって人間的存在へと結実してゆく。こうした成長・発達の可能性と諸環境とのかかわりは複雑で、多くの要因が複合的に関係しあっていると考えねばならない。したがって子どもの自主性の形成過程や構造もまた単純なものではない。

人間の「子育て」はひとつの意図的な働きかけの体系である。子どもの成長・発達の可能性が社会・自然環境と交流するように条件を整えたり、意図的に働きかける諸活動が「子育て」にほかならない。それゆえ、子どもの自主性は家庭・学校・地域社会などの教育的働きかけと、ひとりひとりの子どもの可能性との交流を通して形成されるのである。言うまでもなく、同じ条件の教育的働きかけでさえ、それが個々の子どもに及ぼす影響力は異っている。まして、「自主性」という子どもの人格発達の内面にかかわる能力と教育的働きかけとの関係は複雑である。

われわれは「自主性」を次のように仮説的に定義した。『「自主性」には、すくなくとも、自分で自分の主人公であるという意識が育っていることと、自分の意志で自分の行為を決定し行なう力が養われていること—それを『「自主性」』ということにする—と、自主性を支える行動機制的形成、つまり習慣化され内化された生活・行為規範の確立、の2つが必要であろう。この自立化をうながし、のぞましい自立化の内容をつくる働きかけが『しつけ』である』¹⁾。このような仮説にもとづいて、今日の子どもの自主性の実態を明らかにすることを目標として調査を行い、その結果の概要は『鹿児島の子どもと親の生活と意識調査報告書(第1次)』(以下第1次報告書と略称)にまとめた。

本稿では、仮説的に述べた自主性を構成している「習慣化され内化された生活・行為規範の確立」の実態と自主性の実態とがどのような関係にあるか、つまり、われわれの仮説を1側面から検証することを課題とする。両者の間に高い相関関係があるとすれば、子どもの「自立化」として生活習慣・生活規律の形成のための働きかけ(多くは「しつけ」と考えられる)が重要な意味をもつことになるだろう。

研究の方法

調査の方法の詳細は第1次報告書にゆずり、ここでは本稿の論述に必要なかぎりの基本的データのみを示す。調査は「子どもの自立」の実態とそれに関係していると思われる「基本的生活習慣」・「しつけ」・「親子関係」などとの相関をさぐることを目的として、1980年5月～6月、小5・中1・中3の児童生徒とその母親を対象にアンケート調査を実施した。調査の標本の構成を表1に示す。

われわれは、調査対象者の年齢を考えて自主性の内容を次の4要因でとらえようとした。すなわち、(1)計画性—物ごとに見とおしをもってあたり計画的に行動する (2)自己主張—自己の主体的な認識や考えをもち、それを論理的に主張する (3)自己統制—一時的な感情や自己中心的な考えを抑えて、関係的な認識ができる。(4)責任感—集団のなかで自己の役割を自覚し、民主的な集団の発展のために責任ある行動がとれることである。質問内容は、計画性3問、自己主張2問、自己統制3問、責任感2問の計10問であり、石川勤・藤原喜悦共著『DTI-Diagnostic Test of Independence』（金子書房）を参考にして作成した。

C-22 あなたは、おこづかいを計画をたててつかいますか。〔計画性(2)〕

C-23 毎月のおこづかいで買えない高い値段のものがほしいとき計画的につみたてますか。

C-24 あなたは、勉強の計画を自分でたてて実行していますか。〔計画性(1)〕

C-25 あなたは、自分が正しいと思えば、仲良しの友だちとでも、いいあうことがありますか。〔自己主張〕

C-26 あなたは、いやなことはいやと、はっきり自分の気持がいえですか。

C-27 あなたは、テレビの見たい番組があると、テレビを見てしまい、予定していた計画をか

表1 地区別・性別・学年別構成

地 区	商 業 地 区		旧 住 宅 地		新 興 住 宅		近 郊 農 村		合 計	
学 年・性	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小5	97	78	93	99	102	82	98	87	390	346
小計	175		192		184		185		736	
中1	104	116	107	89	98	96	104	101	413	402
小計	220		196		194		205		815	
中3	89	90	114	111	94	100	102	100	399	401
小計	179		225		194		202		800	
地区合計	574		613		572		592		2,351	
%	24.4		26.1		24.3		25.2			
男・女計	290	284	314	299	294	278	304	288	1,202	1,149
%									51.1	48.9

学年 % 小5 31.3 中1 34.7 中3 34.0

えたり宿題などやれなかったことがよくありますか。〔自己統制(5)〕

C-28 あなたは、自分がやりたいと思っても、人にめいわくになるようなことは、じっとがまんすることができますか。〔自己統制(4)〕

C-29 あなたは、きれいなものでも、からだのためになるものは、がまんして食べますか。

C-30 あなたは、友だちと約束したことは、きちんと守りますか。

C-31 あなたは、学級や係やクラブ（部活動）のしごとをひきうけたとき、せいっぱいがんばりますか。〔社会的責任〕

本稿は、「自主性」の調査項目のうちから、計画性(1)、計画性(2)、自己主張、自己統制(4)、自己統制(5)、社会的責任の項目の、それぞれ自主性の高いグループⅠ群、自主性の低いグループⅡ群に分類して、両グループの子どもの生活習慣・生活規律の実態をクロス分析し、前述の課題を検証しようとする。

各グループ群の構成は表-2に示すが、分析過程では各項目を統合・分化して操作することができる。

自主性と子どもの生活リズム

「自主性」に関するⅠ群とⅡ群は、「生活リズム」についてどのような特徴をもっているのだろうか。

1日の生活の始まりである「起床」の状態は、その生活リズムの形成のうえで重要な位置をしめている。自主性と「起床」との関係を見てゆこう。前述の自主性要因4項目のうちA評価が3個以上を「総合評価A」とし、C評価が3個以上を「総合評価C」として、残りを「総合評価B」とした。その結果、総評Aは自主性の高いもの、総評Bは自主性中程度のもの、総評Cは自主性の低いものと考えることができる。

図-1は、自主性総合的評価と「起床」との関係を示したものである。全体的な傾向としては、A群とB群の間に差がある。すなわち、「ひとりで起きる」子どもは、小5で約15%、中で約7%の差があり、逆に朝の目覚めが悪く「だれかに起こ

表-2 「自主性」各群の構成

	小 5		中 3	
	I	II	I	II
計画性(1)	266	213	162	274
計画性(2)	359	174	350	132
自己主張	510	87	510	37
自己統制(4)	394	103	341	51
自己統制(5)	261	309	102	450
社会的責任	545	21	399	41

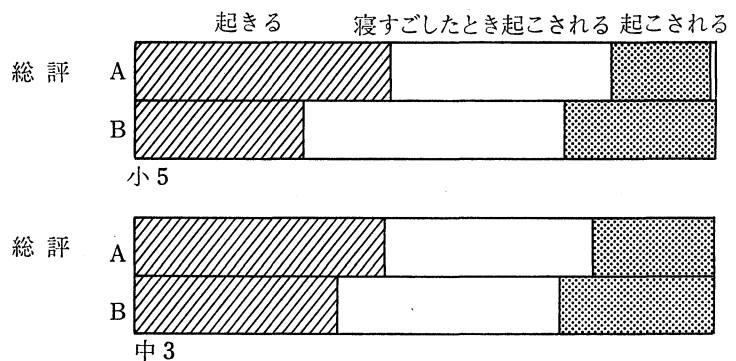


図-1 自主性と起床

表—3 「自主性」要因と起床

(%)

		計 画 性 (1)		自 己 主 張		自 己 統 制 (4)		社会的責任	
		I	II	I	II	I	II	I	II
ひとりで起きる	小5	41	25	33	45	35	27	35	24
	中3	40	39	38	43	38	35	37	46
寝すごしたとき 起こされる	小5	40	44	42	37	44	43	43	43
	中3	30	37	37	43	37	35	36	29
起 こ さ れ る	小5	20	30	25	14	21	30	22	29
	中3	30	24	26	14	24	29	26	24

される」子どもは、小5で約9%、中3で約3%の差がある。小5よりも中3で差が接近するのは、彼らの自覚の生まれたことによるのであろうか。第1次報告書は、「就寝時刻は、同地区、同学年でもかなりちがいがあがあるが、全体的に%のもつとも多い時刻を見ると、小5は9～10時、中1は10～11時、中3は11～12時とほぼ1時間ずつ遅くなっている」²⁾と述べており、小5と中3の生活時間、睡眠時間の相違を考えると、注目すべき傾向である。

自主性の各要因と「起床」との関係を示したものが表—3である。自主性総評では、起床との相関関係が見られたが、自主性の各項目毎に検討すると若干の特徴が見られる。

小5から中3への変化を見ると、「計画性(1)」を除いて、「ひとりで起きる」がI群ではわずかに増加しているのに対して、II群では約10%近い増加が見られる。とくに、「自己主張」や「社会的責任」において自主性の低いII群が、「起床」で望ましい態度をとるのは、中3では生活リズムと「自主性」に関する態度・心性とがある程度切り離されていることを表わしていよう。また、「起こされる」の数値の変化を見ると、II群では減少ないし不変化であるのに対して、I群では漸増している。「計画性(1)」は20%→30%、「社会的責任」は22%→26%と増えており、これも上記の傾向を示している。

「自己主張」「社会的責任」のII群で変化が大きいのは、そうした領域での自主性の低い方が生活リズムを形成していると解釈すべきではない。第1次報告書が言及しているように、「『社会的責任』は、全体として年令の上昇とともに低下する」のであり、とくに中3では「どちらともいえない」という態度保留・未定が増加し、その結果肯定回答が相対的に減少しているために、「ひとりで起きる」のが増加したと考えられる。

「計画性(1)」のI群は、「起こされる」が10%も増加する。これは彼らの勉強時間・睡眠時間との関係があるのであろう。後述するように「計画性」の高い子どもは勉強時間が長く(表—11 参照)、したがって就寝時間が遅いため、朝自分で目覚めることが少ないのであろう。とくに、中1を境目にして勉強への取りくみの姿勢が分化し、受験勉強の追いこまれる中3の多くの生徒の生活スタイルは、彼らの自主性と関係の少ない勉強時間・就寝時間を余儀なくされたものとなる。「起こされる」が「自己統制(4)」以外の要因でI群が高いのは、こうした受験勉強体制の結果と考えることができよう。

「起床」「洗顔」「朝食」「排便」「寝具のかたづけ」の5項目の設問のうち、望ましい回答が3問以上あるものをA、望ましくない回答が3問以上のものをC、残りをBに3分類して生活リズム全体の評価（総合的評価）との関係を検討してみよう。

生活リズムを学年変化で見ると、項目の特徴を3つのタイプに分けることができよう。すなわち、「起床」「排便」の不変低位型、「洗顔」

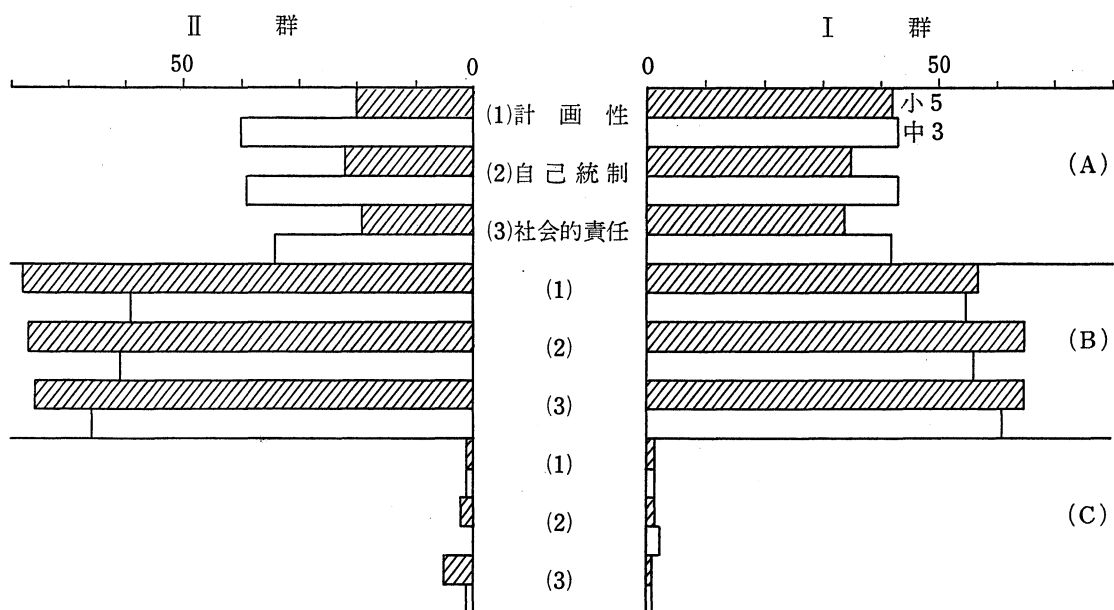
表一4 生活習慣と「自主性」(I)

		計画性(1)		自己統制(4)		社会的責任	
		I	II	I	II	I	II
A	小5	42	20	35	22	34	19
	中3	44	40	43	39	42	34
B	小5	57	78	65	77	65	76
	中3	55	59	56	61	56	66
C	小5	1	1	1	1	1	5
	中3	1	1	2	0	1	0

「寝具のかたづけ」の上昇型、「朝食」不変高位型である。不変低位型は約30%前後を中心にして各学年変化が少なく、上昇型は学年進行とともに10~20%の上昇変化が見られる。それに対して、「朝食」の不変高位型は75~80%の間ではほぼ変化はないが、「朝食を毎日食べない」子どもが20~25%もいること自体が問題である。

図一2は、表一4を図表化したものである。生活リズムと自主性との関係は、全体的に見れば小5ではI群とII群の差は大きく、中3になると、その差は小さくなる。

生活リズムが形成されているAグループを見ると、小5では約15~20%の差があり、自主性の高低は生活リズムの形成と相関していると考えられる。ところが、中3になると両者の関係は小さくなっていく。そのなかで、「計画性」「自己統制」に比較して「社会的責任」の項目で8%の差があるのはなぜだろうか。第1次報告書の次の指摘が示唆的である。『社会的責任』は、全体として年令の上昇とともに低下する。小5で男女とも70~80%の高率を示しているが、中3になると『旧』『農』の女子を除いて50%に下落する。とくに『農』男子は35%をわっている。この傾向



図一2 生活リズムと自主性 (2)

は、(C-30)の回答と逆の形をとっている。中3では、私的な約束を守る責任感はあるが社会的な責任感は乏しいといえよう³⁾。

とくに、生活リズムBグループを見ると、小5でもI・II群の差は小さくともあるが、中3になると全ての領域でII群はI群をこえる。中3ではAグループが「計画性」→「自己統制」→「社会的責任」へと漸減するのに対し、Bグループは全く逆の傾向にあり、自主性は低く生活リズムも中程度の子が多いといえる。

表-5は、生活リズムIの「A」「B」の差を出したものである。自主性が低いII群では小5と中3に1つの特徴がある。小5では55~58%の差に対して、中3では19~32%の差であり、II群でも生活リズムが形成されていることが明らかである。しかし、「朝、自分ひとりで起きれる子どもが少ない。(中3で1/3強)」⁴⁾という問題指摘のある通り、I群とII群の差は小さくなくても、「起床」に関して2/3の中3は問題があるといえよう。表-6は、中3の「起床」と「自主性総評」との関係を示したものであるが、絶対数は少ないが「自主性総評」Cグループも「起床」に関

表-5 「生活リズムI」B-Aの差

	計画性(1)		自己統制(4)		社会的責任	
	I	II	I	II	I	II
小 5	15	58	30	55	31	57
中 3	11	19	13	21	14	32

してはAグループよりも望ましい傾向にあり、この意味からも「自主性」と「起床」の関係は前述のような原因から中3でくずれてきている。

表-6 「起床」と「自主性総評」(中3)

自主性総評	A	B	C
起 き る	39 42.4%	247 350. %	3 60.0%
寝すごしたとき起こされる	33 35.9	270 38.2	24 40.0
起こされる	20 21.7	188 26.6	0 0.0

自主性と子どもの生活規律

自主性と生活規律との関係はどうなっているだろうか。生活規律に関する設問のうち、「勉強時間をきめている」「食事中にテレビを見ない」の2項目を取り出し、I・II群との関係をみる。

表-7は、自主性のうち「自己統制(4)」と生活規律2項目との関係を表わしたものである。

一般に、食事中にテレビを見ていると、食事内容への関心がうすれたり、咀嚼がおろそかになる

表-7 自主性と生活規律

		I 群		II 群	
		小 5	中 3	小 5	中 3
「食事中のテレビ」	見 な い	26%	16%	19%	22%
	見 る	27	43	37	53
「勉強時間」	きめている	35	31	17	18
	きめていない	44	38	63	57

ことが指摘されている。同時に、生活規律を形成するうえでも望ましいことではない。また、勉強時間をきめているかどうかも子どもの生活規律のうえで重要な要素となろう。

概括的に言えば、小5ではⅠ群とⅡ群との間に明確な相違があるが、中3ではそれが若干くずれている。つまり、小5では、「見ない」が7%、「見る」が10%の差によって、Ⅰ群が優位であるが、中3では、「見ない」は-6%、「見る」は10%となり、「見ない」はⅠ群よりもⅡ群の方が高い結果を示している。しかし、これは設問の特殊性による結果と考えられる。後述する「テレビの視聴時間」の中3的特徴を考えあわせると、「食事中にテレビを見る」ほかテレビを見る時間がないほどに彼らの生活は受験勉強に追いこまれていると考えざるをえない。

次に、現代の子どもの「テレビ視聴時間」と自主性との関係を見てゆこう。

図-3は、子どもの平日の「テレビ視聴時間」を地域別に見たものである。第1次報告書は次のように述べている。「1977年のNHK調査によれば、平日のテレビの平均視聴時間は、小学生2時間14分、中学生1時間55分、家庭婦人4時間33分、国民の平均では3時間15分である。では今回の調査では鹿児島県の状況はどうであろうか。(中略)この調査によれば、テレビ視聴時間は、全体の傾向では学年がすすむにつれて減少する。(中略)地域的に長時間視聴の子どもが多いのは、「農」と「商」であり、性別では男子が女子よりも多い。3時間以上の視聴は「農」、「商」では中3男子で20%を超える。小5の長時間視聴はそれほど地域差が大きい、中3では地域差はきわめて大きい。」⁹⁾

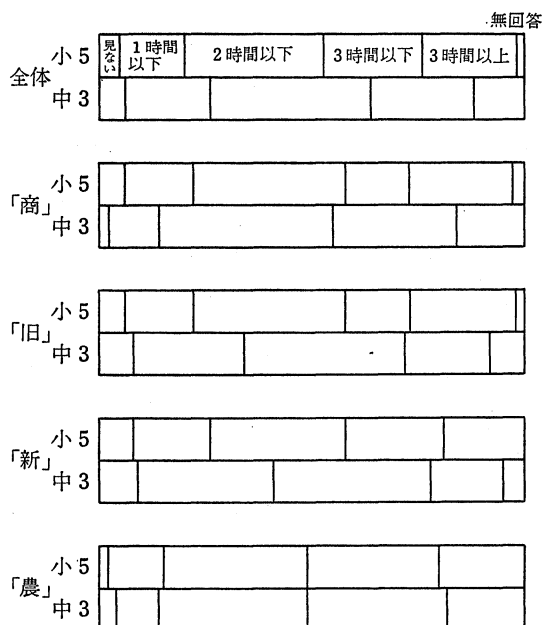


図-3 1日のテレビ視聴時間

学年が進むにつれて「テレビ離れ」が自然におこるのではない。中3の子どもたちの意識的・主体的なテレビ離れではなく、クラブ活動・受験勉強などの他律的な力によって「見たいテレビ番組

表-8 自主性とテレビ視聴時間

		計画性(1)		計画性(2)		自己主張		自己統制(4)		自己統制(5)		社会的責任	
		小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3
Ⅰ群	1時間以下	22	27	15	23	15	21	17	22	25	30	17	20
	3時間以上	17	4	18	8	22	11	17	9	15	3	20	9
Ⅱ群	1時間以下	9	15	12	13	10	24	13	22	7	17	10	32
	3時間以上	29	18	27	17	30	14	32	16	28	14	48	15

注 「1時間以下」には「見ない」を含まない。

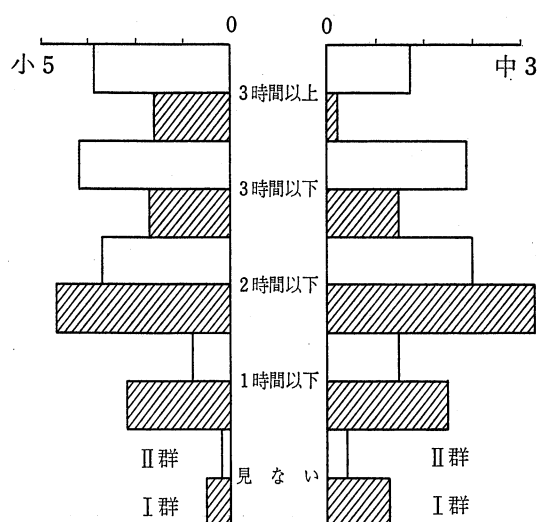


図-4 「計画性(1)」とテレビ視聴時間

も見れない」のが実態のようである。上述の中3の「食事中のテレビ視聴」の実態はその反映である。

ところで、小5にしても中3にしても一様にこの傾向にあるのであろうか。表-8は、自主性とテレビ視聴時間との関係を見たものである。同表は、I群とII群の相違した傾向を示している。すなわち、全体的に見ると、I群は「短時間視聴」型であり、II群は「長時間視聴」型である。とくに、ここでは小5よりも中3にその傾向が著しく、他の生活リズムと自主性との関係と異っている。小5は中3と比較して

時間的にゆとりがあり、テレビを見る傾向が高まることが原因と思われる。

図-4は、「計画性(1)」とテレビ視聴時間との関係を示したものである。両学年とも、視聴時間のピークがI群、II群の間でズレており、計画性の低いものがテレビをだらだらと長時間視聴している傾向を表わしている。この傾向は、自主性の他の要因にも表われており、自主性とテレビ視聴時間との相関関係が高いことを示している。

「勉強の計画性」を見ると、I群とII群の差が見られる。「勉強時間を決める」という主体的な契機を必要とする行為であるがゆえに、自主性との相関関係が高いのである。

表-9は、自主性の各要因と勉強の計画との関係を表わしたものである。「計画性(1)(2)」は別にしても、その他の各要因でもI群はII群より高い数値を示し、両者の相関的な関係を表わしている。しかし、「決めるが守れない」は小5でI群平均21.6%、II群平均19.8%、中3ではI群平均29.8%、II群平均28.3%と両学年とも差は小さい。すなわち、「決めるが守れない」という自己統制・意志の弱さは、I群・II群共通の傾向であるといえる。

次に、「勉強時間」の実態を検討してみよう。表-10は、「家庭における勉強時間」である。本

表-9 自主性と勉強の計画

		I 群						II 群					
		計画性 (1)	計画性 (2)	自己 主張	自己統 制 (4)	自己統 制 (5)	社会的 責任	計画性 (1)	計画性 (2)	自己 主張	自己紀 制 (4)	自己統 制 (5)	社会的 責任
決めている	小5	53	37	29	35	42	32	8	15	29	17	17	10
	中3	55	28	27	31	39	27	11	18	14	18	19	34
決めるが守 れない	小5	21	21	22	21	23	22	16	23	18	20	23	19
	中3	23	34	32	31	26	33	30	30	35	26	34	15
決めない	小5	26	42	49	44	36	46	76	62	53	63	61	71
	中3	22	39	41	38	35	39	58	52	51	57	46	49

表—10 家庭における勉強時間

	あまりしない	1時間以下	1～2時間	2～3時間	3時間以上
小5	5	28	51	12	3
中1	2	6	33	38	21
中3	10	10	27	37	15

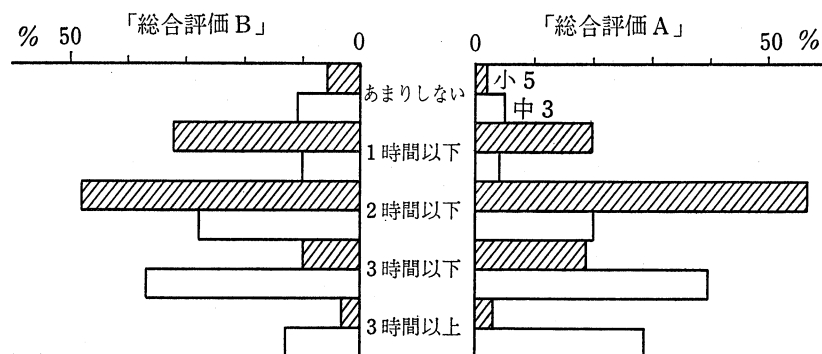
表には出ていないが、地域差と個人差が大きいところに特徴がある。第1次報告書を再度引用しておこう。

「中学校に入学した時は、小学校時代は『あまりしなかった子』もふくめて、勉強への挑戦の気持ちを新たにするのであろう。この中学入学時の子どもたちの意気込みにもかかわらず、中3の受験期には、かなりの『脱落』者を生んでいる。『3時間以上の長時間勉強』のグループが6%、『2～3時間』グループが1%、『1～2時間』グループが6%、それぞれ減少し、『1時間以下』グループで4%、『あまりしない』グループで8%増加するのである。」⁶⁾

こうした「勉強時間」の両極分化現象と自主性とはどのような関係があるのだろうか。

図—5は、自主性に関する総合評価A・B群の勉強時間を表わしたものである。小5、中3ともA群はB群よりも勉強時間は長いといえる。「1時間以下」ではA群よりもB群が多く、「3時間以下・以上」では逆にB群よりもA群が高い比率をしめている。その意味では、自主性総合評価の高いものは、勉強時間が長いといえる。とくに、中3で「3時間以上」勉強するグループはA群はB群の2倍をこえていることは注目を値する。上述したように、中3の勉強時間は全てが自主的・意識的なものとは言い難い面があるが、いずれにしても自主性評価と勉強時間との関係があることは事実である。

そこで、表—11は、自主性の各要因と勉強時間との関係を見たものである。「3時間以上」の勉強時間と答えた子どもの「自主性」とはどんなものであるかを検討する必要がある。小5の場合は各要因ともほぼ平均した数値になっているのに対し、中3では要因によるばらつきがあり、勉強時間が長い中3の「自主性」の構造がある程度推定できる。勉強時間が「3時間以上」はI群では「自己主張」「社会的責任」の数値が低く、逆に、II群では両者の数値が他よりも高い。他の



図—5 自主性と勉強時間

表—11 「自主性」と勉強時間

		計画性(1)		計画性(2)		自己主張		自己統制(4)		自己統制(5)		社会的責任	
		小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3
I 群	あまりしない	1	2	3	9	5	10	2	7	2	8	4	7
	1時間以下	18	3	27	9	26	11	25	7	22	3	27	9
	2時間以下	58	15	54	26	51	25	52	27	54	15	51	28
	3時間以下	19	49	13	36	14	37	18	38	17	35	14	38
	3時間以上	3	29	2	20	2	16	2	21	4	33	2	18
II 群	あまりしない	11	20	8	11	6	11	12	12	9	12	19	22
	1時間以下	41	15	33	12	38	14	38	18	35	11	29	0
	2時間以下	38	31	45	32	45	27	40	28	45	31	48	22
	3時間以下	7	27	10	35	9	27	5	31	9	36	5	32
	3時間以上	2	7	2	10	2	22	4	12	1	10	0	22

要因では、つねにⅡ群よりもⅠ群の割合が高いが、2要因ではそれが逆転しており、ここからは「自己主張をあまりしない。しかも社会的責任の乏しい」ようなガリ勉型の中학생像が描けよう。別言すれば、自主性と勉強時間には全体的な相関関係があるといえるが、その自主性には自己主張の弱さや社会的責任の低下という問題点が指摘できるのである。

「勉強塾」に行っている子どもの自主性はどうであろうか。第1次報告書はこう述べている。「『勉強塾』に通っているかどうか、地域差がある。『新』の子どもは学年が進むとともに通塾者は30%台から60%台に増加するが、『農』では逆に30%台から10%台に減少している。また『新』を除いて、どの地域でも女子の方が塾に行っている者が多い。」⁷⁾ 全体を平均すると、小5 26%、中1 23%、中3 30%であるから、通塾者はそれほど多くはない。図—6に見るように、地域差、男女差が非常に大きいのが中3の特徴である。

表—12は、中3の勉強塾と自主性の関係を見たものであるが、「自己統制(5)」と「社会的責任」が特徴的である。塾へ行っている子どもは「自己統制(5)」に関してⅠ群の比率が高く、「社会的責任」に関してⅡ群の比率が低い結果が出ている。すなわち、塾に通っている子どもは、テレビの見た番組のために自分の計画が変えられることも少なく、学級やクラブの係・しごとに消極的ないし無責任である者が比較的少ないといえる。塾は子どもの生活時間に大きな影響を与えており、学年や地域によっては、塾の生活をぬきに彼らの1日を語るができないほどになっている。しかし、本調査で見ると、通塾者は「勉強の計画性」が高く、勉強に懸命に取りくんで、社会的責

表—12 中3の勉強塾と自主性(%)

	計画性(1)		計画性(2)		自己主張		自己統制(4)		自己統制(5)		社会的責任	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
塾に行っている	34	27	31	27	30	30	32	33	44	27	33	22
行っていない	65	72	69	70	68	68	67	65	54	71	66	76

任も人並みに果すという普通の子どもであり、逆に言えば、塾がそれほど一般化、普及し、彼らの生活にとって特別な存在ではなくなったといえるのかもしれない。

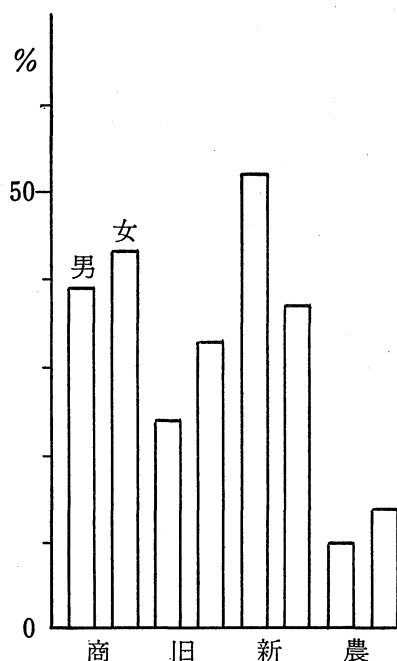


図-6 中3の通塾率

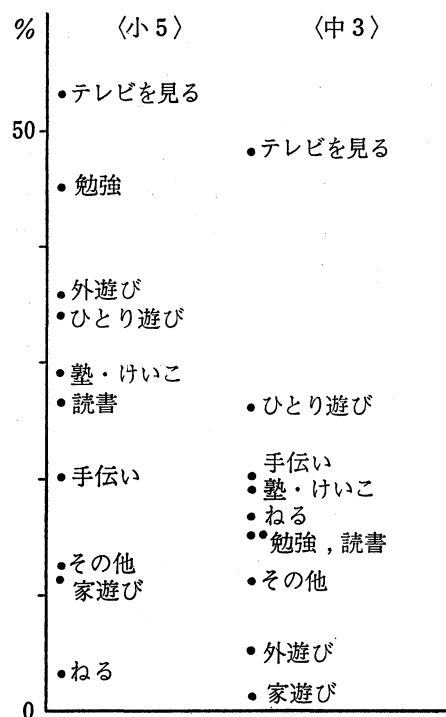


図-7 帰宅後の生活

自主性と帰宅後の生活実態

子どもの「生活規律, リズム」のうち、彼ら自身が自主的に選択・利用できる学校から帰宅後の時間の使い方は、「自主性」と結びつきをもっているのではなかろうか。子どもの生活が忙しくなってきたと言われているが、そのなかでも放課後・帰宅後の時間は比較的自由に使える時間であり、そこでの彼らの生活意識・実態を知ることは重要である。

図-7は、小5・中3の帰宅後の生活の実態である。全体を平均すると「テレビをみる」が50%前後にのぼっている。小5・中3では生活時間が異っているにもかかわらず、テレビが他を離して上位にあること、とりわけ、中3では「ひとり遊び」26%との差が20%以上もあることは問題を含んでいよう。小5でも「友だちと外で遊ぶ」は36%にすぎず、「テレビを見る」「家で勉強する」がそれをこえていること、「ひとり遊び」「塾・けいこごと」など集団的な活動が少ないことなど、従来から指摘されてきたことを裏付けている。

全体的に見ると、地域差や男女差は少くない。そのなかでも対照的な地域をとりあげて比較をしたのが図-8である。小5は、時間的ゆとりがあるためか中3に比較すると、生活にバリエーションがある。しかし、中3では地域差、男女差が少く、「テレビ」「塾・けいこ」「ひとり遊び」など孤独な時間を過ごす傾向が強い。

さて、「帰宅後の生活」と自主性との関係を示したのが表-13である。地域別、男女別の図-8

表-13 帰 宅 後 の 生 活

		計 画 性 (1)		自 己 統 制 (4)		社 会 的 責 任	
		I	II	I	II	I	II
「小5」	家 で 勉 強	58%	30	52	29	48	24
	ひとりで遊ぶ	28	33	31	35	33	52
	テレビをみる	46	55	48	55	51	67
	本 を 読 む	35	16	29	17	29	19
	家で友だちと遊ぶ	15	6	12	12	11	9
	外で友だちと遊ぶ	40	37	36	34	37	33
	寝 ー ー ー	3	4	2	3	3	10
	家 の 手 伝 い	26	18	24	12	23	19
	塾やけいこごと	32	21	31	26	31	24
	そ の 他	10	12	11	12	12	24
「中3」	家 で 勉 強	24	11	21	16	17	27
	ひとりで遊ぶ	22	25	23	24	23	29
	テレビをみる	40	49	48	45	49	44
	本 を 読 む	14	15	19	12	18	17
	家で友だちと遊び	1	2	0	4	1	7
	外で友だちと遊ぶ	3	6	3	6	3	10
	寝 ー ー ー	23	17	17	10	16	27
	家 の 手 伝 い	21	19	19	14	20	10
	塾やけいこごと	17	18	20	24	21	12
	そ の 他	9	11	9	10	9	7

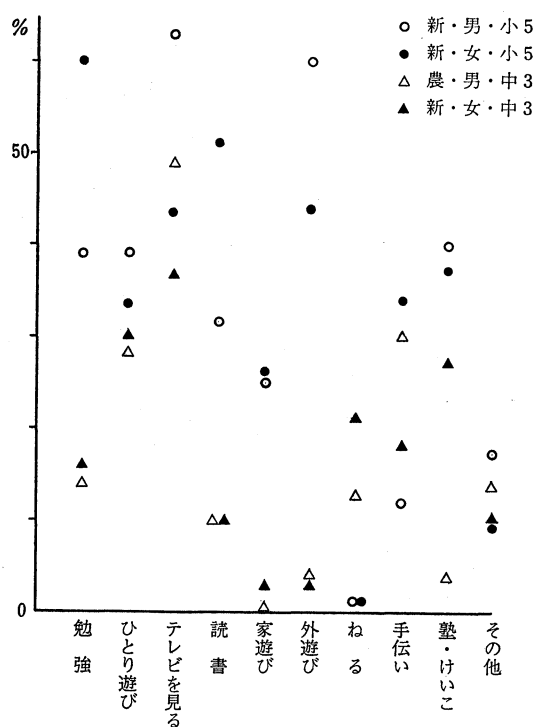
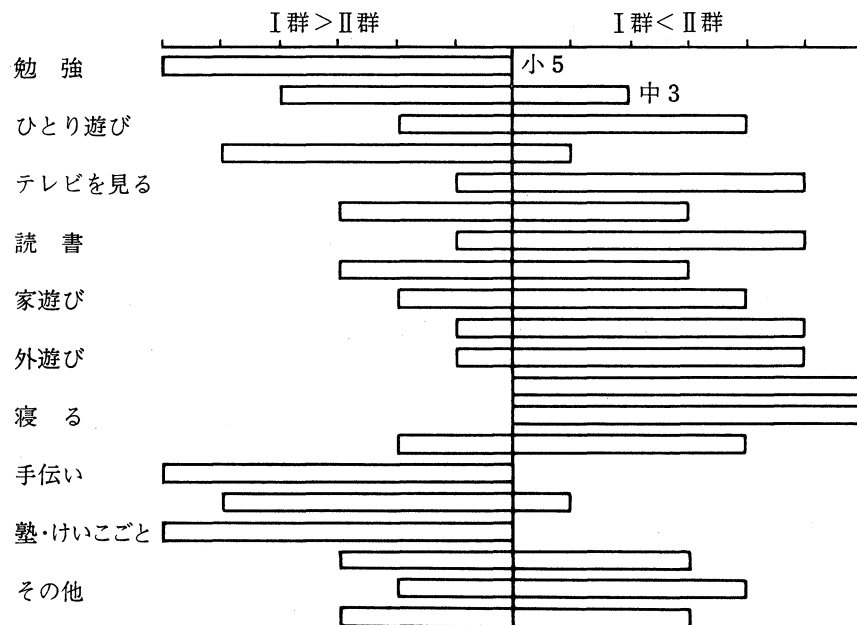


図-8 地域別の帰宅後の生活

で見たように、生活の内容は孤独なものになっており、しかも「テレビを見る」が非常に高いことも問題であろう。「自主性」の高低と生活実態とはどのような関係になっているのであろうか。

小5では、「家で勉強」「読書」「外遊び」「家の手伝い」など自主的・主体的な生活態度がⅠ群で見られるのに対して、Ⅱ群では「ひとりで遊ぶ」「テレビを見る」など受動的な生活態度が目立っている。この意味では、「帰宅後の生活」と自主性との相関関係があると考えてよい。ところが、中3ではこうした関係がくずれてくる。例えば、「家で勉強」「テレビを見る」などは自主性要因によってⅠ群とⅡ群の比率が反対となって相関関係は成立しない。また、「読書」の比率が小5より低く、「寝る」が平均16%



図一 9 自主性と帰宅後の生活

に達しているところに、今日の中学生像が描き出されている。

図一 9 は、表一 13 の 3 要因のほかに「計画性(2)」「自己主張」「自己統制(5)」を加えてそれらの I・II 群の割合を比較し、自主性の高低との関係を示したものである。

小 5 と 中 3 で一致するものはない。しかし、小 5 では、「家で勉強」「手伝い」「塾・けいこごと」は全要因で I 群 > II 群の関係があり、「テレビを見る」「読書」「外遊び」「寝る」は、I 群 < II 群の傾向が強い。中 3 では、「ひとり遊び」「手伝い」では I 群 > II 群、「家遊び」「外遊び」で I 群 < II 群の傾向が強く、生活実態と自主性との関係が希薄になっている。小 5 と 中 3 の「帰宅後の生活」時間の絶対的な相違や自宅での学習量の差、心身の発達の違いなどがその原因として考えられる。

「自主性」の各要因ごとに分析してゆくと問題点が明らかになってくる。自主性の各要因のうち全体的な傾向に反する要因を分析してゆくと、「小 5」「中 3」に共通なものは「自己主張」要因である。例えば、小 5 の「テレビを見る」「読書」は、「自己主張」だけが I 群 > II 群でその他の要因は I 群 < II 群になっている。中 3 でも「塾・けいこごと」「家遊び」が同様の傾向にある。中 3 では「社会的責任」も次にこの傾向がある。これらのことは、自主性要因のうち「自己主張」「社会的責任」の 2 要因は、自主性の高低のなかでバランスを失うことが多いことを示している。つまり、小 5 の「テレビを見る」は、「自己主張」を除く 5 要因で自主性が低いにもかかわらず、「自己主張」だけは高い子どもなのである。今日の子どもの生活状況でいえば、帰宅後「テレビを見る」という非主体的な生活をする子どもが、「自己主張」の点では自主性が高いということになる。逆に、「家で勉強」する子どもは、「自己主張」「社会的責任」において自主性の低い子どもが多いのである。

また、小 5 から 中 3 への変化を見ると、「家で勉強」「塾・けいこごと」では自主性の低いグルー

プも増加し、「テレビを見る」は自主性の高いグループが増えているように、中3になると「自主性」と「帰宅後の生活」との相関関係がくずれ、そこに中学生という発達段階の心身の成長・変化をつかむことの困難さや、今日の受験教育体制下の中学生像があらわれていると考えられる。

親の「しつけ」と自主性

今日の子どもの「自主性」と生活規律・基本的生活習慣との関係を見てきた。既に述べたように、自主性は単に自然成長的に形成されるものではない。子どもをとりまく社会的・自然的条件、具体的に言えば、彼らが生活する地域社会・家庭、家族・保育者・教師、近隣の友だちらとの相互交流のなかで形成される。とりわけ、子ども——父母との関係は、一般に最も緊密な関係で結ばれており、そこでおこなわれる「しつけ」という教育行為は「自主性」の基底を形成するうえで重要な役割をはたしている。しかし、この教育行為は子ども——父母（家族）との相互的な関係のもとでおこなわれるのであるから、父母からの一方的・強制的なしつけが高い効果をあげるという単純なものではない。

ここでは、母親のしつけと自主性とのかかわりを実態をとおして見てゆこう。第1次報告書は、しつけの全体的な状況を次のように概括している。「一般的には、基礎的なしつけは大多数の子どもに定着している。それはとくに中学生になってから向上している。道徳的な面を含む自主性もかなり子どもたちが身につけてきている。とくに自制心+誠実（正直）などは中学生になってから著しく向上する。身のまわりの整理などもよくなる。しかし自分の意見や考えをはっきりと云うとか、生活のきまりをつけるとか、努力するという自主性の中でも核になるような部分は弱く、小学生のときとあまり差のない状況にとどまっている。家事の手伝いなど、家庭の中での役割を果たすといった『生産』的な積極性はとくに低い状態である。しかも、これらの状態は男の子の場合はほとんどの項目で平均より悪い。『主張』『意志（努力）』といった通常は男の子の方が良いと思われるもので、女子の方が高いのである。」

子どもの生活習慣や生活規律の達成状況と自主性との関係を見よう。生活習慣に関する項目を「しつけA」、生活規律に関する項目を「しつけB」とし、自主性の「総合評価」との関連を見たのが表—14である。しつけの達成度は、母親が子どもの生活をとおして生活習慣や生活規律がど

表—14 自主性としつけの達成度

達 成 度			小5・自主性「総評」			中3・自主性「総評」		
			A	B	C	A	B	C
し っ け A	上 位		90	82	56	87	83	100
	中 位		9	16	44	12	16	0
	下 位		1	2	0	1	1	0
し っ け B	上 位		52	36	22	65	45	40
	中 位		48	64	78	35	55	60
	下 位					0	0	0

のように定着（達成）しているかを判断したものであって、ここでは母親の「しつけ行為」の直接的な関係はない。

生活習慣は、平均すると小5上位グループ84％、中位グループ15％、下位グループ2％、中3ではそれぞれ83％、15％、1％とほとんど学年差はない。しかし、生活規律では小5上位グループ41％、中位グループ59％、下位グループ0％、中3はそれぞれ47％、52％、0％と達成度は生活習慣よりも低い。小5→中3への若干の上昇が見られる。

それらを自主性とのかかわりで見ると、生活規律には特徴がある。自主性が高いグループAについて見ると、小5では「しつけB」の達成が上・中位とほぼ同じ割合であるのに対して、中3では30％の開きがあり、生活規律の定着が自主性の形成とつながりのあることを示している。しかしここでは、生活規律が形成されたから自主性が生まれたのか、あるいはその逆の関係であるのかは判断はむづかしい。小5よりも中3で両者の関係が大きいという事実、しかも後述するように「自主性」の内容によってそれらが差異をもっている事実を指摘するにとどめる。

次に、自主性の各要因と「しつけ」との関係を見る。

第1次報告書は、しつけの努力としつけの定着との関係をこう述べている。すなわち、「自主性のしつけを、主張・意志・誠実・けじめ・計画性の5項目でとらえようとしたが、（中略）5項目は親のしつけ努力においても、また達成度からみても、質的な差異をふくむものである。」
「主張・誠実・けじめのしつけについては強く意識しているが、計画性・意志はあまり重視していない。この傾向は地域や子どもの性によって変動はあるが、この分極化自体は共通している。この重視されていないしつけが、現在の子どもの共通の弱点として指摘されている『がんばりのなさ』や『消費的傾向』とかかわりの深いものであることは考えさせられる。」⁸⁾

図-10は、「計画性(2)」のI群とII群における親のしつけの努力とその子どもへの定着を見たものである。「むだづかいをせぬようにいう」という親のしつけ努力は、小5・中3ともI群よりもII群がやや高い。つまり、自主性の低いグループの方が親のしつけ努力はやや高いのである。ところが、それがどの程度定着しているかの親の認識は、逆に両学年ともII群よりもI群が10％以上高いことを示している。しかし、この10％以上の差（正確には、小5 15％、中3 14％）はどのように評価すべきなのであろうか。「自主性(2)」は、I群 小5 48％、中3 44％、II群 小5 23％、中3 16％という数値を見るかぎり、I群では小5は親の子どもの実態把握と子どもの自己認識とはほぼ一致しているが、中3では実態以上に親の過大評価がある。中3にもなると

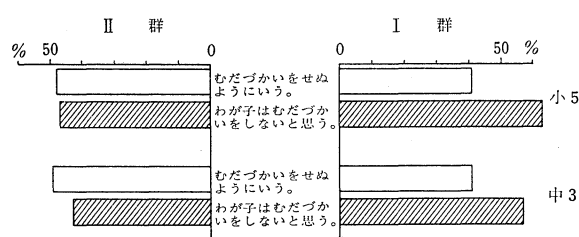


図-10 自主性と親の「しつけ」努力

親が子どもの小づかひの使い方などにあまり注意をはらわないことの反映かも知れない。また、II群でも同様の傾向があり、小づかひの計画的な使途については親は子どもに甘いのが現状である。

「自己主張」はどうであろうか。M-30「お

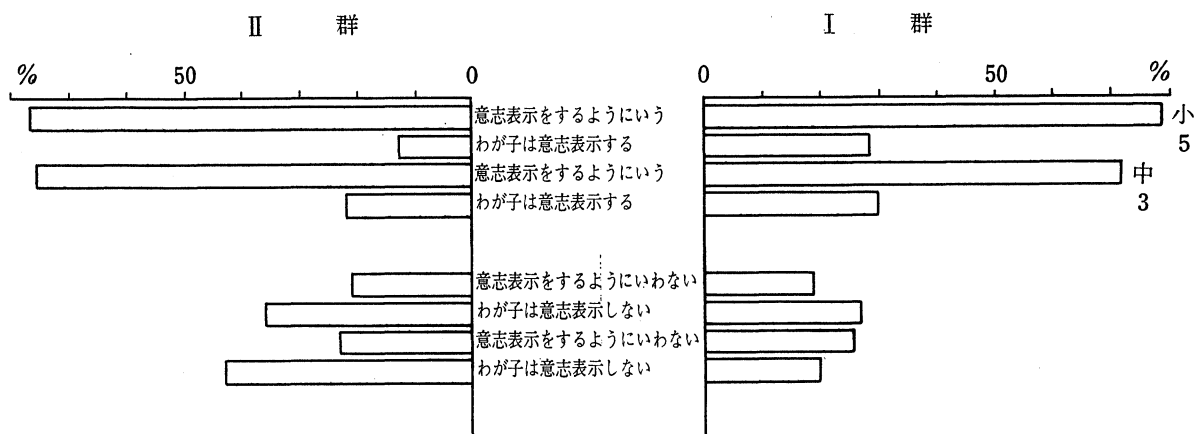
子さんに自分の考え意見をはっきりいうようにしつけていますか」への問いに対する結果は、表—15の通りである。それに対して、母親の子どもの認知を示したのが表—16である。しつけ行為では小5、中3とも70%代、「しつけをしない」が中3で少し増加している。この結果、子どもは意志表示をするようになっていると判断しているかという、わが子は意志表示をする子どもだと見ているのは25~27%にすぎない。この実態は第1次報告書によれば、「親のしつけの努力は全般的に高く、親がこのしつけに価値を認めていることがわかる。学年による低下もそれほど著しくない。しかし子どもの状態は、親の評価によると良くない⁹⁾」となっている。こうした親のしつけ・親の認知と子どもの自己生活の実態との関係をみたのが、図—11である。小5・中3とも親の「しつけ」はⅠ・Ⅱ群とも大きな差はない。

表—15 「意志表示」に関するしつけ努力

	小5	中1	中3
意志表示をするという	78	78	71
意志表示をするようにいわない	20	20	27

表—16 「意志表示」の親の認知

	小5	中1	中3
意志表示をする	25	26	27
どちらかといえばする	32	31	31
意志表示をしない	30	29	24



図—11 「意志表示」に関する親の認知と子どもの実態

ところが、小5・中3とも「自己主張」と答えたものはそれぞれ68%、64%もあり、母親が考える以上に子どもは自己主張できていると思っている。しかも、中3になると自己主張・意志表示するの回答が低下し、多くが「どちらともいえない」という態度保留にまわっていることを考え

表—17 自主性と「しつけ」達成度

		計画性(1)	計画性(2)	自己主張	自己統制(4)	自己統制(5)	社会的責任
小5	しつけ A	13	9	2	17	8	5
	B	30	19	7	25	15	6
中3	しつけ A	8	3	3	22	12	22
	B	16	17	5	29	20	24

合わせると、親は子どもを低く評価していることになる。

「しつけ達成度」と自主性のその他の要因と関係を考えて、いくつかの特徴がある。「しつけ達成度A・B」の達成度の高いグループと前述の6要因のI・II群の差を示すと、表-17のようになる。生活習慣・生活規律のしつけの達成度は高くても小5では「計画性(1)」「自己統制(4)」はI・II群の差が大きく、計画をたてて勉強のできない子ども、人に迷惑をかけぬようがまんのできない子どもはその比率が低い。同様に、中3では「自己統制(4)」「自己統制(5)」「社会的責任」の要因で差が大きいので、自己統制力や社会的責任感が低い子どもは生活習慣・生活規律の達成度の割合が低いといえる。

ま と め

子どもの自主性と日常的な生活習慣、生活規律との関係をアンケート調査結果のクロス分析によって検討してきた。子どもの生活習慣（生活リズム）や生活規律の形成の土台は、主として家庭における親の「しつけ」として形成され、それらが子どもの社会的交流のなかでなんらかの形をとって定着する。しかし、それは人間の認識・意欲行為との複合的な関係のなかで形成されるものであるから、その形成過程や構造を単純化することは危険であるとも言わねばならない。したがって、われわれが自主性に関して仮説をもち、その仮説を検証するために自主性と子どもの生活習慣・生活規律との関係を分析したことも「自主性」形成の1側面の研究にすぎないことを改めて断っておきたい。

自主性と生活習慣・生活規律との関係は、生活習慣と生活規律をある程度分けて考えた方がよい。生活習慣の形成と自主性は、小5では高い相関関係にあり、中3になると両者の関係はくずれる。しかし、中3で関係がくずれる原因は、彼らが自主的でなくなったのではなく、主として受験勉強によって生活習慣を他律的に変えさせられることにある。生活規律に関しても同様な傾向をもつ反面、中3では2大分極化現象とも呼ぶべきことがおこる。つまり、受験教育体制のもとで他律的に生活時間を作られていながら、自主性のうち計画性、自己統制では高く、社会的責任や自己主張では弱いという子ども像と、受験教育体制から脱落したと思われる非自主的な子ども像である。それらは生活習慣や生活規律のあり方で一見同じ現象を呈していながら、自主性の要素をたどってゆくと異った様相をしており、その意味では中学3年生という時期の「自主性」の判断は非常にむづかしいと言えよう。また、本稿では分析対象としなかった中学1年という時期が、小5と中3を分析するなかで彼らの人格形成の大きな転換点であることが結果的に明らかになった。

前述したように、子どもの自主性は自然成長的に形成されるものではなく、子どもの人格発達の内的な力に対する教育的働きかけの結果として現われる。本稿の分析は、少なくとも小5段階までは自主性の形成が、主として「しつけ」とよばれる家庭を中心とした生活習慣（リズム）や生活規律を土台として成立することを明らかにした。したがって、家庭における「しつけ」が一定の意義をもつと結論することができよう。しかし、「しつけ」の内容や方法には相当の注意をはらう必要が

ある。個々の観点は第1次報告書と本論の内容にゆずるが、基本的な観点として次のことが言えよう。すなわち、親が子どもの自主・自立を獲得してゆく契機を準備したり援助する場合に、子どもの内的な可能性に依拠しつつ、彼らひとりひとりの内面的な矛盾を発達の可能性へと転化させうる働きかけでなければならない。生活習慣・生活規律の獲得という平凡な“しつけ”にさえも、親がいかに子どもを内面で把握し、それに見合った教育的働きかけをするかが重要な視点となろう。

註

- 1) 鹿児島子ども研究センター『鹿児島の子どもと親の生活と意識調査報告書（第1次）』（1981）p. 1
- 2) 同前 p. 24
- 3) 同前 p. 42
- 4) 同前 p. 37
- 5) 同前 p. 21
- 6) 同前 p. 23
- 7) 同前 p. 14
- 8) 同前 p. 66
- 9) 同前 p. 67